

研修参加報告書

令和7年10月27日

会派名 江南新風クラブ

会派代表者 伊藤 吉弘

参加者：宮地友治、稲山明敏、伊藤吉弘、尾関 昭、
東猴史紘、藤岡和俊、牧野行洋

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年月日	令和7年10月9日（木）～10日（金）
研修時間	10月9日（木）9：30～16：30 10月10日（金）9：30～12：00
研修場所	ライトキューブ宇都宮
研修内容	<p>第87回 全国都市問題会議 成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～</p> <p>[基調講演] 人口減少・成熟時代の都市とまちづくり</p> <p>[主報告] 人口減少社会に対応する都市の構造改革 ～100年先も発展できる「ネットワーク型コンパクトシティ」 の形成～</p> <p>[一般報告] ・「縮充」発想による公共施設マネジメント ・都市縮小時代の持続可能なまちづくり —高松・丸亀町に見る都市の再生と自立性— ・次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくり</p> <p>[パネルディスカッション] 成熟社会の都市のかたち ～コンパクトで持続可能なまちづくり～</p>
■目的	<p>成熟社会の都市のかたち～コンパクトで持続可能なまちづくり～について、全国的な状況と問題点を捉え、先進的な取組事例を学ぶことにより知見を得て江南市のまちづくりの参考とする。</p>

■内容

【第1日】

○基調講演

人口減少・成熟社会の都市とまちづくり

広井 良典 氏 [京都大学名誉教授]

欧州の地方都市の様子、都市中心部の自動車規制と歩いて楽しめる街の実体、環境・福祉・経済の相乗効果について説明、その過程で持続可能な都市を目指すべきという会議全体の方向性を述べた。

高度成長期と人口増加期に無計画に都市を拡大し、その構造を残したまま成熟することはできず、コンパクトなまちづくりが求められていると説き、持続可能な都市の再編にあたっての方向性として、若い世代の「ローカル志向」が増えていること、地方にいながら世界一になる人が出てきたことなどに触れながら、生成AIを利用したシミュレーションモデルの結果を活用し、今後、地方都市における商店街復活が各地に起こり、「多極集中」となる国家ビジョンについて説明した。

○主報告

人口減少社会に対応する都市の構造改革

～100年先も発展できる『ネットワーク型コンパクトシティ』の形成～

佐藤 栄一 氏 [栃木県宇都宮市長]

宇都宮市の都市機能はコンパクトに集中していたが、人口増加により郊外に拡散し発展してきたが、現在の人口減少社会においては、郊外に拡散し発展したきたことが、多くの問題を生んでおり「第5次宇都宮市総合計画基本構想」に、「ネットワーク型コンパクトシティ（以下、NCC）」を将来の都市構造と掲げまちづくりを進めている。

NCCは、中心部と周辺の各地域それぞれの維持・発展を目的とし、独自の連携・集約型の都市構造を目指すもので、中心部、郊外部にある生活・産業・観光といった都市拠点を、交通ネットワークで連携することで、拠点間の機能を補完し、都市機能を充実することとしている。

宇都宮市では、平成27年に策定したNCC形成ビジョンに基づき、2050年を見通した将来の都市形成の実現に向けて、取り組んでいる。

○一般報告

・「縮充」発想による公共施設マネジメント

南 学 氏 [東洋大学国際PPP研究所シニアリサーチパートナー]

成熟社会における公共施設のマネジメントとして、縮小しても機能を充実させる「縮充」の概念を提唱し、人口がピークアウトして減少に向かい、成長から成熟への社会変化にあわせて、社会行動も変化する必要があると説明した。

公共施設は再配置計画に沿って計画はしているが、多くの計画が順調に進まない理由として、多くの自治体が実施したことがない計画で、組織が縦割りであることなどをあげ、対策の例としては、主たる施設の包括的点検と修繕委託を総合ビルメンテナンス会社に委託することにより、保守点検作業などを一元的に管理し、優先順位をつけ、時間とコストの削減を達成するとともに、内製化により小規模修繕などが迅速かつ手軽に行われる効果も得られると述べた。

- ・都市縮小時代の持続可能なまちづくり
—高松・丸亀町に見る都市の再生と自立性—
大西 秀人 氏 [香川県高松市長]

都市縮小時代において持続可能なまちづくりを進めるためには、都市の質を高め、魅力的で暮らしやすい都市に再構築することが重要であり、そのためには、地域に根ざした持続的な都市経営が必要であると述べた。

高松市は、構想から30年以上かけて、衰退する一方だった丸亀町商店街の再生に着手。住民、商店経営者、地権者、行政が一体となり、投資の回遊性と賑わいの創造、歩いて暮らせる都市構造、市民主体の合意形成とまちづくりを進める中で、行政は、制度と法の支援、財政的支援とリスク分担、中立的な調整者としての機能を果たしながら、持続可能なまちづくりを進めている。

- ・次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくり
森本 章倫 氏 [早稲田大学理工学術院教授]

コンパクトシティの実現に向けた施策として、都市と交通についての視点を提示し、今後は次世代交通システムのデザインとして、交通機関がICTで結ばれ、シームレスに利用できる人を中心とした交通を考えるべきであると述べ、中心エリアでは徒歩によるウォーカブルなまちづくりを目指し、移動手段として、次世代型路面電車、タクシー、ライドシェアの利用をあげた。

成功例として、人口減少の速度は低下し、ライトトレイン利用者の増加、自動車利用者は減少となったこと、公共交通全体の満足度調査では、大幅な満足度の増加を結果として残している宇都宮市の取組を示した。

【第2日】

○パネルディスカッション

成熟社会の都市のかたち

～コンパクトで持続可能なまちづくり～

内田奈芳美 氏 [埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授]

- ・まちなかの「パブリック・ライフ」の再考
：成熟社会におけるコンパクトな都市を考える上で

吉田 元 氏 [株みちのりHD代表取締役グループCEO (兼)
関東自動車(株)代表取締役社長]

- ・成熟社会における公共交通ネットワークの進化と持続可能性への挑戦

山下 裕子 氏 [まちなか広場研究所主宰]

- ・「いくつになっても」「出かけていけ」「出かけたたい」都市について
思案する。

青山 剛 氏 [北海道室蘭市長]

- ・室蘭市におけるコンパクトなまちづくり
—課題解決先進地への挑戦—

伊木 隆司 氏 [鳥取県米子市長]

- ・歩いて楽しいまちづくり

～公共交通と歩行者中心の持続可能なまち～

ディスカッションの中心となった宇都宮市は、子供たちに公共交通への理解を深め、将来にわたって利用をしてもらうため、公共交通の普及のための乗り方教室を開くとともに、市内在住の小学生から高校生に相当する世代を対象に地域連携 IC カードを無償で配布し、配布数は 50,000 枚を超え、子供たちが日常的に公共交通を使うようになっており、LRT とバスを乗りついで通学する生徒には、定期購入額の 3 割を補助しているほか、市内であれば片道運賃の上限を 400 円とする乗り継ぎ割引を導入し、高齢者には外出と歩行の増加を期待し、年間 10,000 円分のポイントを支給している。

また、大谷観音などで有名な大谷地区への利用者の増加を図るため、大谷観光 1 日乗車券を企画販売し、観光客や関係する人の利用が増え、現在は増便されている成果が出ている。

利便性向上のためにキャッシュレスを促進しているほか、他市における AI オンデマンドバスの状況に対応しつつ、宇都宮市のカーボンゼロシティ計画に合わせて EV バスを導入し、2025 年 2 月からは、全国で初めての取組として BRT 専用道における中型バスによるレベル 4 自動運転の営業を開始し、車内が無人となる遠隔監視型運行の実現を目指している。

■所感

宇都宮駅西エリアに広がる商業地と歴史街エリア、東に広がる工業団地、大型商業施設、新開発エリア、学校などを結ぶ LRT や、各地の住宅地を結ぶバス網など、まさにコンパクトシティの見本のような、設計だと感じた。

持続可能な都市を形成するため、公共施設やサービスの縮小という言葉に対して、「縮充」という概念を持ち、「縮充」の中で包括的管理委託を進める流れは良い方法であると感じた。

また、商店街の若手の有志が地元全体の景観や機能を考えたプランをまとめ、地権者、行政と協力しながら再生を行った例は、とても興味深く、地方自治のあり方の根底について共感するものであった。

持続可能なまちづくり、コンパクトシティの実現に向けて、人をつなぐ交通の重要性が多く語られ、中心部と各拠点の整備と、郊外や過疎地を結ぶ公共交通網について、先進的な多くの事例から、現実と理想を乗り越え実現している実施方法など、多くを学ぶことができた。

成熟社会、コンパクトシティ、持続可能なまちづくりについて、これからの江南市のまちづくりの参考としていく。